2023年10月22日（聖霊降臨後第21主日、特定24、A年）

牧師メッセージ

「刻印」

（マタイによる福音書22:15-22）

司祭ヨセフ太田信三

「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていませんか。」ファリサイ派の人々が主イエスに問いかけました。これは非常に巧妙に仕組まれた罠です。当時イスラエルを支配していたローマ帝国へ税金を納めることは、ユダヤ人にとっては経済問題であると同時に宗教的な問題でした。当時、ローマ皇帝は神格化され始めていたからです。神格化された人間に税金を取めるとなると、それはイスラエルの神への背信行為になってしまいます。ですから、もしも主イエスが「皇帝に税を納めるべきだ」と答えれば、ローマの支配を認め、神以外のものを神とする不信仰者であると、主イエスへの人望を失墜させることができます。逆に否定すれば、ローマへの反抗者として主イエスを訴えることができます。いずれの答えをしても、主イエスを陥れることができる恐ろしい罠です。

さて、彼らの問に対し「偽善者たち」と答え返した主イエスは、彼らの悪意に気付いています。「税金に納めるお金を見せなさい」と言われた彼らは、デナリオン銀貨を差し出しました。そこにはローマ皇帝の像が刻まれています。それゆえ、この貨幣を彼らが普段用いているなら、それは彼ら自身が神を冒瀆していることとなります。彼らは銀貨を差し出すことによって、普段の生活では何ら疑問を抱くこともなくこの銀貨を使用していることを暴露してしまったのです。日常生活では貨幣に刻まれた皇帝の像を問題にしないのに、主イエスを罠にかけられるために敬虔ぶる彼らはまさに、「口先では神を敬うが、心は遠く離れている」偽善者です。

主イエスの、「皇帝のものは皇帝に。神のものは神に返しなさい」という言葉にある「もの」とは「刻印」のことです。主イエスは、「皇帝の刻印は皇帝に、神の刻印は神に返しなさい」と伝えたのです。刻印という単語は「エイコーン」というギリシャ語で、「似姿」とも訳されます。創世記において、神はご自分の似姿として人間を造られました。人間には神の似姿が刻まれており、神の言葉がその心に刻まれています。（創世記1:26、エレミヤ書31:33参照）ファリサイ派の人々は硬貨に刻まれたローマ皇帝の刻印は見えているのですが、自分自身が「神の似姿」であることを忘れてしまっています。主イエスは「神のものは神に」と言うことで、他ならぬ「あなた」に神の像が刻まれていることを思い起こさせ、「神の刻印があるあなた自身を、神にささげなさい」と伝えたのです。主イエスはこうして、自らを陥れようとしたファリサイ派の人々をも、まことに神に従う道、神の似姿として、神に自らをささげ、神とともに生きる道へと導かこうとされたのです。